

# 風呂が変えた、 日本人の美意識

「銭湯は、上方とは異なる美意識の誕生にひと役買いました」と話すのは、駒沢女子大学教授の石田かおりさん。そして、それは今の日本人にも連綿と受け継がれているのです。



「肌競花の勝湯」豊原国周画

左側に番台と脱衣場、中央にぬか袋を口にくわえている女性。壁には広告も。にぎやかな声が聞こえてきそうな女湯の様子が描かれている。国立国会図書館蔵

湯につかる風呂と  
ぬか袋の誕生

「江戸時代以前、お風呂といえば『室』と呼ばれる蒸し風呂のことでした。湯につかるタイプのお風呂が初めて現れたのは、江戸時代の初期。東京・日本橋付近に伊勢与市という人がつくった銭湯が始まりだったといわれます」と、石田さん。

江戸中期になると、銭湯は街の角々に立つほど軒数が増え、町人たちがこぞって行くようになったといわれています。

「江戸後期の作家、式亭三馬が記した滑稽本『浮世風呂』には、銭湯の様子が活写されていますが、その当時、女性たちが銭湯へ行くときの必需品といえば、ぬか袋でした。庶民であれば木綿、裕福な人であれば絹、中でも最高級は紅絹。紅絹

は紅花で30回以上も染めないといふ美しい色にならなかったため、大変な高級品でした」

江戸時代は、徹底したリサイクル社会。衣服は傷んだら何回も仕立て直し、いよいよ着られないとなれば布団に、それもダメとなれば赤ん坊のおむつや雑巾、そして最後は燃やした灰を植木鉢の肥料にしたほど。そんな中、ぬか袋もはぎれを利用してつくっていたのです。

## 素肌美と洗い髪

「女性たちは、自分でつくった袋に米ぬかを入れて

石田かおり

いしだ・かおり 駒沢女子大学教授。博士課程まで西洋哲学を専攻した後、約27年間大手化粧品メーカーに在籍して化粧文化研究を担当。現在の専門は化粧の哲学、AIの哲学。著書に『化粧と人間 規格化された身体からの脱出』（法政大学出版局）『京の「はんなり」江戸は「粋」魅せる女の極上作法』（祥伝社）など。